



過年度参加者コラム

川田 雅俊 先生（守谷市立守谷小学校・外国語・3～6年生）



（←）茨城県国際交流協会のプログラムである「ワールドキャラバン」を利用し、7カ国7人の講師の先生が本校に来校し、児童と交流しました。たくさんの異なるバックグラウンドを持つ方々と長時間話す機会にはなかったので、子どもたちはとても楽しんでいる様子でした。

（→）この写真では、スリランカに興味を持った児童たちが、エゴダさんからスリランカの有名な食べ物や文化について英語で話を聞いている様子です。自分の知っている英語でなんとか質問をする姿も見られました。興味を持っているので、緊張しながらも楽しみながら参加しています。



北沢 春和 先生（茨城県立並木中等教育学校・英語・2年生）



（←）ラオスで購入した教材を使って折り紙をしました。教材をそのまま使っても良いのですが、Googleの言語自動変換機能で言語をラオ語から英語に変えて、英語学習と関連づけて活用しました。授業のちょっとした時間に継続してできる活動なので、教材を買っておいてよかったと思います。

（→）ラオスでお世話になった通訳のブンタさんとオンライン交流会をしました。日本語でのラオス紹介の後に生徒からの質疑応答を行いました。ラオスと日本の共通点や違いについて、また、ブンタさん自身の言語学習についてなど、たくさんの質問が出ました。何より現地の方と交流できたことが生徒にとって貴重な体験となりました。



越沼 有子 先生（栃木市立合戦場小学校・教務主任）



(→)「第2回グローバル集會」

グアテマラを取り上げた理由は、教師海外研修でお世話になった JICA 筑波の情野さんが JICA 海外協力隊で活動された国だからです。今年度のグローバル集會は、オンラインではなく、本校に情野さんをお招きして、直接お話を伺いました。

(←)「ラオスからグアテマラへバトンタッチ」

昨年度は、ラオスとオンラインでつないでグローバル集會を実践しました。今でもラオ語「サバイディー」で元気にあいさつをしてくれる子もいます。今年度は、グアテマラにバトンタッチ。グアテマラで話されているスペイン語で「オラ」「アディオス」を練習しました。

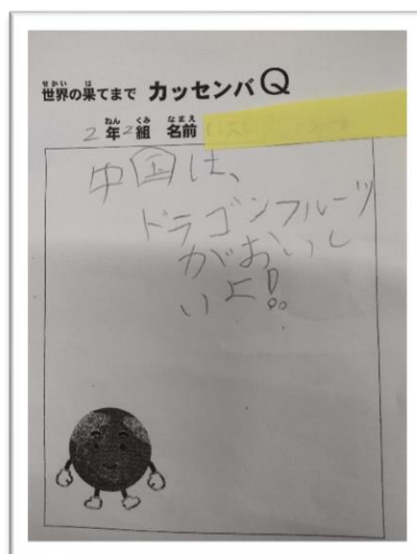


(→)「外国とつながりのある子どもたち」

これまで自分とつながりのある国について語る機会の少なかった子どもたちが、「カッセンバQ」に紹介をしてくれるようになりました。自分のアイデンティティーを自然に語ることができる、そんな場になったことがとても嬉しかったです。

(←)「カッセンバQ」

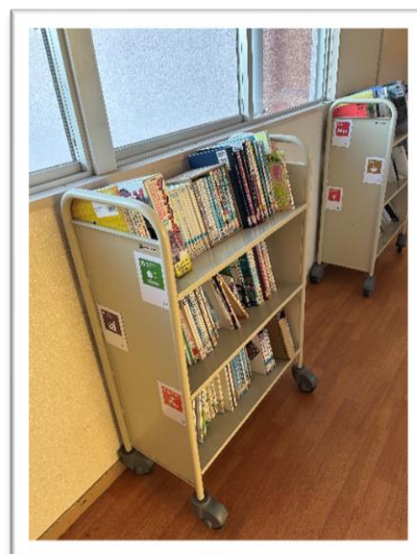
日常的に、楽しみながら、世界に目を向けてもらいたいという思いから「カッセンバQ」を始めました。自分の知っている世界のことを用紙に書いて、ポストに入れます。グローバルコーナーに掲示したり、給食の時間に放送したりしました。



白澤 拓也 先生（茨城県東茨城郡茨城町大戸小学校・ICT,研究主任・2 年生）



(←)勤務校が変わり、2年生を担当することになった。昨年度のように、ラオスの友人と遠隔授業を行ったり、国際教育や開発教育を行ったりすることが難しくなった。このような状況でも、「継続は力なり」の言葉を信じ、教室の一角に国際コーナーを作成した。続けることで誰かの何かにいつか響くと信じて、これからも続けていく。



(→)普段の生活の中に SDGsカードやポスター、資料などを紛れ込ませる。意図的に子供たちの中の興味関心をくすぐる仕掛けを、生活の中、授業中の発言の中にちりばめる。子どもたちにとって、どのような気付きがあるのか、どのような学びがはじまるのか、想像することはできないが、いつかの為の種まきを続けている。

田母神 亘 先生（大田原市立金田北中学校・社会科・1 年生）



(←)本校の総合的な学習の時間では、生徒たちが将来の目標や夢を実現するための取組を考え、SDGs の 17 項目の中から関連するテーマを選択します。その上で、日常生活の中で実践可能な行動を計画し、それらの成果をスライドにまとめて発表しています。導入の際、ラオスでの研修の話をしてイメージをもたせています。

(→)ラオスでお世話になった ISAPH の石塚さんに、生徒と一緒に送った応援メッセージの写真です。昨年度、「昆虫食で世界を救えるか」という授業実践に協力していただいてから今でも交流があり、今年度も JICA 海外協力隊のご経験についての話を生徒にしてもらう予定です。

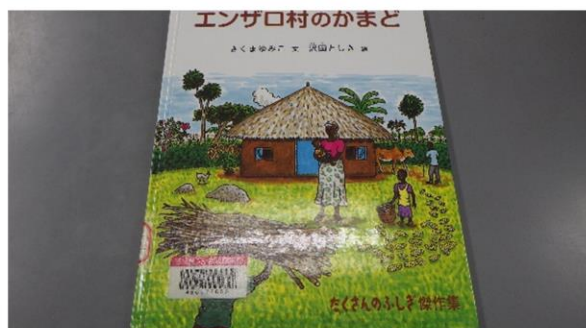


樽井 里実 先生（宇都宮市立姿川第二小学校・全科(体育・音楽・外国語を除く)・6年生）



(←)昨年度と同じメンバーで6年生に進級しました。5年生の総合「姿二小環境会議を開こう」で考えた“食品ロスを減らすために自分たちにできること”の一つである給食の配膳の工夫は今年度も継続しています。残食による食品ロスに問題意識をもち、学んだことや考えたことが1年後の生活にもつながっています。

(→)道徳の学習では、JICA で活躍された岸田袈裟さんの支援活動をもとにした「エンザロ村のかまど」を通して国際親善について考えました。岸田さんの思いについて考えを深める中で、支援を必要としている国々や人々に対して自分はどんなことをしているのか、一人一人が考えました。多様な考えが出てきました。



(←)6年生の国語「発信しよう、私たちの SDGs」の学習では、昨年度の SDGs に関する学びが生きています。伝えたい相手や伝える目的に応じて、内容や構成、まとめ方を工夫しながらパンフレットづくりに取り組んでいます。

土屋 啓一 先生（取手市立永山小学校・教頭）



(←)11月に県教育委員会などがラオスに関する授業の参観に来ました。授業の内容はラオスでインクルーシブ教育に携わっている NPO の方と東京パラリンピック100mラオス代表選手とオンラインで結び、交流をする内容でした。授業後、「教育いばらき」という広報誌に総合的な学習の特集として、本実践が取り上げられました。



(→)国際理解教育を充実させる方法の1つとして、教科横断的な実践があります。この写真は英語科の教員の協力のもと、JICA 筑波に来ていた研修員を中学校に招待して、交流授業をした様子です。生徒たちは日本文化の紹介をしたり、折り紙で鶴を作成したりすることで、JICA 研修員と交流を深めました。



(←)ラオスに関する授業実践を、茨城県教育弘済会主催の「教育に関する研究論文」と放送大学大学院の修士論文にまとめました。教員海外研修で学んだことを生徒たちに授業で還元することが大切ですが、実践を後世に伝えることも大切だと思います。論文にまとめることで、自分自身の実践を振り返る機会となりました。

本論文は、公益財団法人日本教育公務員弘済会茨城支部主催「令和6年度第48回教育に関する研究論文」にて、優秀賞を受賞されました。おめでとうございます。

(→)12月に急遽、勤務していた中学校から小学校の教頭として異動することが決定しました。中学3年生を対象に「ラオス学」という授業を実践している途中での異動だったので、十分な成果が上げられませんでした。しかし生徒たちはわずか1時間で色紙を作成し、プレゼントしてくれました。



